

**正阿弥勝義**  
**「穂落ちの鶴香炉」「香盒(亀)」**  
 明治期を中心に、陶芸や金工、七宝など工芸の諸分野では、大変精緻な作品が作られ、国内外の人々を驚嘆させました。今日においても、その超絶した技の世界は、色あせることなく、私たちに魅了されます。正阿弥勝義(1832-1908)もその一人。近年、さまざまな展覧会に取り上げられています。  
 この作品は、明治34年(1901)、勝義が数え年70歳の時、吹屋(現高梁市)の富豪広兼康保の「初老」の祝いに制作したことが箱書きに記されています。鶴が田を作り、

神に奉ったという「鶴の穂落ち」の故事に因む意匠で、鶴の羽根の細かい彫り、色金による目元や頬の複雑な造作、穂穂の粗一粒、亀の首や足のたわみ、爪の先まで、実に細やかです。「初老」の祝いは、男性の本厄42歳の厄落としを示し、長寿を願って「鶴亀」の慶事セットを贈ったのでしょう。  
 なお、以前「70歳の祝い」と誤って記載したことがあり、訂正し、お詫びします。  
 【学芸員 福箱幸】

鍵岡館長の  
**美術館  
 体験の記**  
 ③

**「美術館とデザイン」①**

「美術館とデザイン」については、まず美術館の建築デザインがあり、そこから生まれる展示空間デザイン、それを活用しての展覧会のデザインがある。さらに美術館とその活動を報せるポスターなどのグラフィック・デザインがあるだろう。

美術館の建築デザインは、美術館が所蔵する美術品を一般公開するための機能、それに幅広い美術を見る機会である展覧会開催の機能が求められる。その他美術館の諸機能を生かしながら、建築デザイナーにとり、美術館建築は自己の建築思想を表現するための絶好の機会である。古今東西にわたり美術館建築には建築家の代表作が多い。そうして私たち美術館を訪れる観客は、まず美術館建築のデザインでその美術館を記憶し、イメージを作りあげる。とても大切な美術館のイメージ形成である。

最近リニューアル・オープンした東京青山にある日本や東洋美術の蒐集で知られる根津美術館は、隈研吾設計の和風モダン建築であり、金沢21世紀美術館の妹島和世設計の軽快な建築デザイン、それらは従前の堅牢で19世紀的美の殿堂の名残りもある近代美術館建築から、大きく転回している。美術館の建築デザインは、時代精神の自由な芸術表現であるといえる。

わが岡山県立美術館は、お隣の岡山市立オリエント美術館と各々が設置目的に適いながら、岡田新一設計の堅牢な現代美術館の建築デザインを表現している。

僕が体験した、セゾン現代美術館は軽井沢の自然の中にある菊竹清訓設計の瀟洒な夏館に彫刻家若林喬が設計した庭園とで美術館空間を形成している。高知県立美術館は瓦屋根と土佐漆喰を使う土地にこだわる、日本設計の建築デザインである。

人々は美術館を、まず美術館建築で記憶し、デザインで覚醒する。建築デザインは美術館を体現しているのである。  
 【館長 鍵岡正謹】

**近ごろの美術館 展示照明の役割** — LED照明の使用にあたって—

今春、リニューアル工事を行った当館ですが、その他にも設備面で小さな改善が日々行われています。岡山の美術「国吉康雄・坂田一男・小野竹喬・森谷南人子 生誕120年を記念して」展の後期展示からLED照明(※1)を使い始めたのも、その一つです。

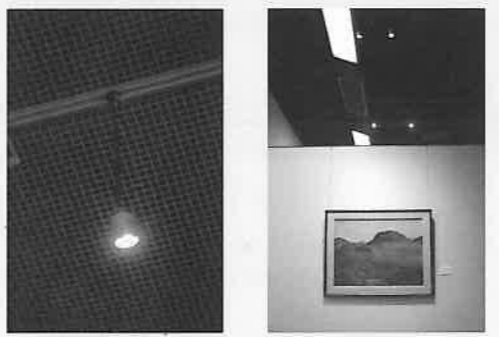
照明が展示に果たしている役割について、普段はあまり意識しませんが、展示作業を行っている際に、実感する事があります。作業が終盤に入り、照明の調整に入り始めると、不思議なことに、照明を点けていくごとに、それまではいかにも「作業中」だった室内が「展示室」らしくなっていくのです。単純に明るくなった、という点もあるとは思いますが、雰囲気をつくるという点において、照明が大きな位置を占めている事に改めて気づかされます。

ところで、光というのは、強いエネルギーでもあります。例えば絵画を日光にさらしておくと、色褪せてしまうなど、良くない影響を与えてしまう事はご想像がつくと思います。展示の照明の光であっても同じ事がいえるのですが、それを出来る限り避けるために、展示照明の明るさには一定の目安があり、当館においてもその目安に準じて照明をしています。

その点、LED照明は赤外線・紫外線(※2)を出さないため、注目されています。ただ、色の見え方について、発光中の部分もある(※3)ようで、今は既存の照明と併用して使っています。色みや輝き方が異なるので、「生誕120年」展では、いつもの作品も、また違う表情を見せてくれました。これも岡山の美術展ならではの楽しみと言えるかもしれません。

さて、当館は12月から1ヶ月余り休館し、老朽化した空調設備の工事を行っています。照明のように、ぱっと目に見える部分ではありませんが、収蔵庫の管理に関わる重要な部分です。見える部分も、見えない部分も、少しずつ変わりながら、皆様をお迎えする準備をすすめています。  
 【学芸員 子川さつき】

(※1) LED:発光ダイオード(Light Emitting Diode)。電流を流すと発光する半導体素子的一种。  
 (※2) 作品に退色、劣化、温熱などの影響を及ぼす。  
 (※3) 今回は、Ra97の照明器具を導入。



実際の器具  
 モノクロではわかりにくいのですが...

**寄贈品紹介**

このたび、岡山県立美術館では、高原洋一氏のシルクスクリーン作品12点と海見久子氏の絵画1点をご寄贈いただきました。ご寄贈下さいました高原洋一氏、海見知子氏に厚く御礼を申し上げます。

1944年に岡山市田中に生まれた高原洋一氏は、現代日本の版画界を代表する作家の一人で、昨年開催された「高原洋一 風景のメタモルフォーシス」(奈義町現代美術館、岡山市デジタルミュージアム、倉敷市立美術館)は記憶に新しく、本年に岡山県文化賞、山陽新聞賞、マルセン文化振興財団文化大賞を受賞されました。

高原洋一の作品は、写真を加工したシルクスクリーンの版画で、写し取られた風景はほんの少し手を加えることにより、鮮やかな変容をとげ、見るものの視覚を揺さぶります。近年は作風に変化が見られ、意欲的に創作活動を展開しています。今回寄贈いただいた作品によって初期から現在までの仕事をほぼ辿ることができます。

- 高原洋一氏寄贈作品
- 1) ずれた路上の白線 1979年 42.2×59.7cm
  - 2) 水田の上の幾何形・・・A 1979年 58.0×83.3cm
  - 3) Geometry on the Stream・・・No.V 1980年 80.0×120.0cm
  - 4) A Figure on the Ground 1981年 98.0×135.0cm
  - 5) GEOMETRIC NARCISSUS AK 1986年 95.0×135.0cm
  - 6) GEOMETRIC NARCISSUS 90・MA 1990年 87.0×59.5cm
  - 7) An Anecdote of the Earth 94・B 1994年 110.0×175.0cm 【図版作品】
  - 8) 大地の上の形象から剥離する形 V 1994年 82.5×112.5×10.0cm
  - 9) 地層年代記 1998年 239.2×235.5cm
  - 10) 地層 陽 1999年 110.0×311.6cm
  - 11) Prometheus on the Rock of Mannari Ⅲ・A 2000年 80.0×103.0cm
  - 12) 気圏・窓A I 2009年 42.0×84.0cm



高原洋一「An Anecdote of the Earth 94・B」1994年



海見久子「鳥の歌-さえずる気配」2006年

海見久子氏は1931年高梁市成羽町に生まれ、1954~63年グループせいき会で活動。1958年から自由美術協会展に出品を続け、1965年同協会の会員となっています。個展、グループ展で作品を発表し、1991年からアート・SUN展(倉敷市立美術館)に参加。1994、96年には岡山県現代洋画選抜展(岡山県総合文化センター)に出品。2003年に海見久子展-「鳥の歌」-(奈義町現代美術館)が開催されています。2007年逝去。戦後もまもなくの頃から抽象絵画の世界に入り、一貫して抽象絵画の表現を追求し続け、詩情豊かな色彩表現で知られています。  
 【学芸課長 妹尾克己】

平成20年(2008)10月に笠岡市立竹喬美術館において「彩艶 金谷朱尾子 ーうつろう心」展が開催された。その展覧会で大きな注目を集めた女流日本画家・金谷朱尾子(1953~2004)(本名燕子(におこ))は、岡山市生まれである。岡山大学附属中学校から岡山県立岡山朝日高等学校を経て京都市立芸術大学美術学部日本画科に学び、卒業後は池田遙邨の青塔社に入塾。昭和56年(1981)、若干28歳にして第13回日展出品作《塔と人とうつろいと》で特選受賞。日展や女流画家展に出品を重ね、岡山大学教育学部特別教科<美術工芸>教員養成課程日本画教室講師も勤める。昭和58年(1983)に青塔社を退会してからは、女流画家展、個展等に出品、絵本の挿絵にも携わる。的確な人物デッサンと構成力を元に描かれた独自の人物表現は、画家の内面性を強く反映しており他に類を見ない。51歳の若さで亡くなったが、画派に従属することなく自身の信念を貫き通した稀有な画家である。

このたび寄贈を受けた《わが裡なる火山列島》(1982)は、日展特選を受賞した翌年の日展無鑑査出品作で、最も充実した時期の勢いのある作品である。タイトルどおり画家自身の内面のエネルギーを発散させるような作風で、制作に対する強い意欲を感じさせる。

また《春という名の神話》(1994)は、女流画家展出品作で、豪華な花々の中にベルシャ猫が描かれ、金箔・銀箔で流水文様的な装飾が施された華やかな作風であり、《わが裡なる火山列島》とは別の面を示している。

2点とも筆勢が充実していて密度の濃いものであり、《わが裡なる火山列島》は《塔と人とうつろいと》(笠岡市立竹喬美術館蔵)に並ぶ画家の代表作と言える。

また《春という名の神話》も、人物をテーマとした作品が多い中で異彩を放つ作品である。「金谷朱尾子展」ののち、作品の多くは遺族により、当館のほか笠岡市竹喬美術館・倉敷市立美術館・新見美術館等に寄贈され収蔵されている。今後ますます紹介される機会が増え、評価の高まっていく画家であろう。寄贈者のご厚意に心より感謝いたします。  
 【主任学芸員 中村麻里子】



《春という名の神話》1994年



《わが裡なる火山列島》1982年

ドイツ連邦共和国における文化教育の力  
 (平成21年度日独青少年指導者セミナー<芸術分野>派遣事業に参加して)

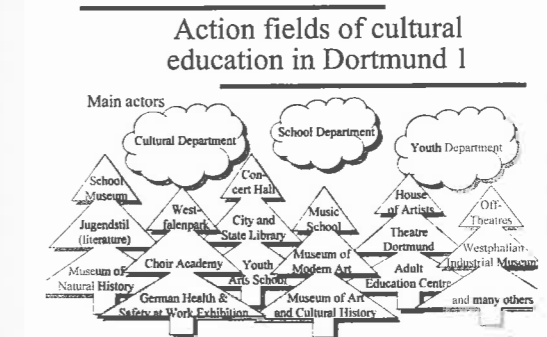
10月28日(水)~11月10日(火)までの約2週間、日独青少年指導者セミナー(芸術分野)派遣事業に参加という幸運に恵まれた。この派遣事業は、日独両国の青少年教育指導者の資質の向上と青少年育成の発展を目的として、昭和47年に開始された国際交流事業である。平成20年度から「学校及び学校外における美術教育」をテーマに、芸術及び教育関係者の交流を行ってその2年目となる。今回はベルリンとドルトムントに各1週間ずつ滞在し、そこを拠点に学校及び学校外の教育施設等を視察・交流した。ドイツでは、美術が「文化教育」という大きな枠で捉えられ、文化に興味関心がある特別な人だけのものではなく、全ての人の生活の中に自然にとけ込んでいて「行政・学校教育・学校外の教育施設の連携」がバランスよく行われていることを各訪問先で感じた。その一例としてドルトムント市での視察・交流を簡単に紹介する。



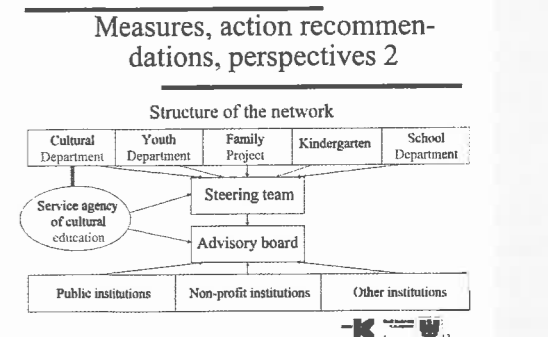
(図1) ドルトムント市文化教育の説明の様子  
 (左:通訳ハイケ・パチケ氏、右文化教育政策担当:マルティナ・ブラッケ氏)

サッカーファンからはお叱りを受けそうだが、私は「ドルトムント」という都市名を知らなかった。人口58万7千人、全ドイツで6番目か7番目の大きざらしい。また、「ルール工業地帯」に代表されるように、伝統的には石炭や鉄工業等の重工業、ビール街として栄えたが、エネルギー需要の変化に伴った産業構造の転換にせまられ、失業者も多い(失業率12~13%)という。このような街で取り組まれた行政・学校教育・学校外教育をつなぐネットワークの構築について、副市長ビルギット・ヨールダー氏と文化局文化教育政策担当マルティナ・ブラッケ氏からのプレゼン(図1)後、ディスカッションを行った。

ドルトムント市における「文化教育」という考え方は50年代からあり、当時は現代アートの美術館で絵画教室などの運営がなされていたという。激しい産業構造変化に伴い2002年に「ネットワーク」をキーワードに文化教育コンセプトを練り直した。そしてネットワークから考え出された文化的プロジェクトの実現には、ノルトライン・ヴェストファーレン州からの経済的支援及び政治的援助があり、ノルトライン・ヴェストファーレン州の各都市が文化教育コンセプトを作成し、特徴ある恒常的なプロジェクトを展開しているという。そのコンセプトづくりでは、課題や目的の洗い出し、どういう分野で何ができるのか・どう継続していくか、そしてどのような連携組織が有効であるかということが順を追って語られ、文化教育を推進するための強力なネットワーク組織の紹介があった。(図2・3)



(図2) 文化教育に携わる関係諸機関



(図3) ネットワーク組織

州や市(行政)の文化教育に対する理解のもと、明確なコンセプトにそったネットワーク組織に興味を持ったのは当然のことだが、これを構築したマルティア・ブラッケ氏その人本人への興味が一番強かった。なぜ行政の立場の彼女がこれほどまでに強い信念の元この仕事ができるのか。彼女は経済を専攻し行政に入ってから文化教育に携わったとのこと。あえて理由を挙げるとすれば、子供の時、青少年芸術学校で演劇を学んだ経験から芸術の力に確信を持っている。だから今の仕事に取り組めるのかも、と。ドイツにおける文化教育が、特殊な専門家を育てることだけを目的とせず、全ての人の生活にとって必要不可欠であるということが国民に根付き、それが次世代へと確かに受け継がれていく形を目の当たりにした。まさに文化教育の力である。最後に、ドルトムント市は来年ヨーロッパ文化首都になる。ますます目が離せない街になりそうだ。  
 【教育普及担当 岡本裕子】